

令和4年度

文化芸術による子供育成推進事業 巡回公演事業

一般社団法人観世会 能楽公演



能「安達原」シテ：観世清和

本日のプログラム

1. イントロダクション／能を知る
2. お稽古／実技体験
3. 上演曲の解説
4. 能「安達原」上演
5. 質問の時間

(※各校により内容が異なる場合があります)

安達原のあらすじ

諸国を巡って修行の旅をしていた山伏たち（ワキ）が、陸奥（東北地方）の安達原（現在の福島県二本松市）で夕暮れを迎えます。山伏たちは運良く一軒の家を見つけ、そこに住む年老いた女主人（前シテ）に頼み込んで、一晩泊めてもらうことになりました。どこか寂しげな女主人は、糸車（糸繰りの道具）を回しながら日々の辛い生活の様子などを語り聞かせます。やがて夜が更けて寒さが強くなると、山伏たちに「決して寝室は見えないように」と言い聞かせて薪を取りに出かけて行きました。しかし、好奇心が抑えられなくなった山伏の一人が寝室を覗き込んでしまったのです。部屋の中には、数えきれないほどの死骸が積み上げられ、慌てた一行は急いでその場から逃げ出します。そこに鬼となった女主人（後シテ）が追いかけてくるのですが、山伏たちは一生懸命に祈り、その法力に負けた鬼女は姿を消すのでした。

室町時代に大活躍して能を作り上げた世阿弥は、役者としての生き方や心構えを『風姿花伝』をはじめとする本にまとめました。その言葉は能の役者だけではなく、現代を生きる私たちにも多くのことを気づかせてくれます。

「初心」ってなんだろう!?

「初心」とは、まだ右も左もわからない不慣れな心の状態を指します。世阿弥は未熟だったときのことを忘れず、努力を重ねていくことが大切だと強調しました。でも、初心の段階をひとつ乗り越えても、また新たな初心の段階が訪れます。だから世阿弥は「時々の初心を忘れないように」とも伝えました。子供でも大人でも、初めて経験すること（初心の境地）はたくさんあります。そんなとき、上手く出来なかったときがあったことを忘れずに目の前のことに丁寧に向き合っ、常に芸を向上させようとする思いがこの言葉には込められています。

「離見」が芸の上達に欠かせない!?

スマホで動画撮影が気軽に楽しめる現代。動画に写った自分の姿を見て、今まで気が付かなかったクセなどを発見したことはありませんか？ 自分の姿を離れて観察する、これが「離見」です。世阿弥が生きた室町時代は、動画撮影技術などありません。でも、一流の役者であった世阿弥はそれでも自分がお客さんからどう見えるのかを常に考え、もし下手に見えるところがあれば直してこうと努力したのです。初心を忘れずにいつも努力し、ときには自分を冷静に観察して良くないと改め、真の花（本当の美しさ）を残そうとした世阿弥の生き方には、私たちも学ぶべきものがたくさんあるはずです。

世阿弥のことば

初心忘るべからず

秘すれば花

人を惹きつける「花」とは!?

能の世界では花の一言が、美しさや魅力という意味で使われます。毎日、たくさん稽古をして芸を身につけたら、すぐにお客さんにそれを見せるのではなく、一度は自分の内側にそっと秘めてみる。すると、それが人の魅力を高める花（美しさ）になると世阿弥は考えました。しかし、植物の花と同じように、役者の花もずっと保ち続けられるものではないことを知っていたのが世阿弥のすごいところ。やがて、年老いたときに残る花を「真の花」と呼び、妥協を許さない厳しい修行をいつも積み重ねていったのです。

一般社団法人 観世会

東京都中央区銀座6-10-1
GINZA SIX 地下3階

TEL. 03-6274-6579
FAX. 03-6274-6589
ホームページアドレス <https://kanze.net>
メールアドレス kanzekai@kanze.net

一般社団法人観世会は、1900年に設立された伝統芸能「能楽」観世流の中心を担う団体です。代表を務める二十六世観世宗家 観世清和は室町時代に能楽を大成した観阿弥・世阿弥父子の流れを汲み、日本の能楽界を牽引する重要な立場にあります。東京・銀座にあるにじゅうごせかんぜこんきねんかんぜのうがくどう 二十五世観世左近記念観世能楽堂を活動拠点に定期公演を開催し、約700年にわたる伝統の継承と普及・発展に取り組んでいます。





はやわねんびよう
早分かり年表！

3つの時代から学ぶ「能の歴史」

能には約700年にわたるとても長い歴史があります。
令和の時代を迎えた現在、世界の人々に楽しまれる
能の歴史を3つの時代に分けて学んでいきましょう。

能は、日本で誕生した仮面劇

能は仮面（能面といいます）をつけて演じられる日本独自の演劇です。昔の人が作った200種類以上の物語を中心に、今も新しい作品が作られることもあります。能の大きな特徴は、神様が鬼が登場するお話がたくさんあること。たとえば、神様が現れて「毎日が平和でありますように」と祈ったり、怒っている鬼の気持ちを祈りの力で鎮めたり——能には祈りの場面がたくさん描かれていることから、「祈りの芸術」としても長く親しまれてきました。

主役をシテ、その相手役をワキと呼び、笛や鼓などの奏者（囃子方）と、情景描写や登場人物の気持ちなどを謡い上げる地謡という出演者とともに物語が進んでいきます。その歴史は室町時代に始まりますが、起源を辿っていくと1300年以上前の奈良時代にまで遡ることもできます。

1

室町時代

1336年～1573年



歴史のスタートは室町時代

今から約700年前の室町時代、能は現在のようなスタイルに完成されました。その中心的役割を果たしたのが観阿弥・世阿弥の親子です。能の役者としてだけでなく、物語の演出家としても才能を発揮し、今もふたりの作った能が数多く上演されています。また、世阿弥が書き残した『風姿花伝』は世界最古の演劇論として現在では世界中で親しまれているのです。

2

江戸時代

1603年～1868年



江戸時代、能は公式の芸能に！

徳川家康が江戸に幕府を開き、約250年にわたる江戸時代がはじまります。徳川幕府は、能を「式楽（公式の儀式で用いる芸能）」として認定し、能は格式のある芸能として大切にされたのです。その影響を受けて全国の大名も能を愛好し、お屋敷には能舞台が作られることも珍しくなく、庶民の間では能の謡（物語のセリフ）のお稽古が人気を博します。

3

昭和・平成・令和の時代

1926年～現在



世界が認める舞台芸術へ

昭和の時代になると、能の海外公演も活発になります。世界最古の演劇として、能が作り出す独自の美しさが世界中の人たちに伝わったのです。その結果、平成20年にはユネスコの「世界無形文化遺産」に登録されます。平成28年にはアメリカのニューヨークで毎年開催される世界的な演劇の祭典「リンカーンセンターフェスティバル」に二十六世観世宗家 観世清和、嫡男の観世三郎太をはじめとする観世会の能楽師が出演しました。5日間行われた能楽公演は大成功し、世界の人々から喝采を浴びました。



ふしぎ
不思議がいっぱい



のうがくどう

み

能楽堂のなかを見てみよう！

能楽堂を訪れると、伝統的な建築様式の大きな舞台が目飛び込んできます。能舞台は、普通の劇場にはない造りがたくさんあります。一つひとつの意味を学んで、能を楽しみ鑑賞しましょう。

橋掛り

あげまく ほんぶたい つづ みち
揚幕から本舞台へ続く道が橋掛りです。能舞台独自の舞台空間で、ここでの演技も見逃すことができません。

屋根

ふたい うえ おおき やね
舞台の上には大きな屋根があります。屋根の存在はその昔、能舞台が屋外にあった名残です。

四拍子

しびょうし
みぎ じゅんぼん ふえ こつづみ
右から順番に笛、小鼓、大鼓、太鼓の楽器を担当する役者が並びます。それぞれの楽器の音色が、物語の雰囲気を一層と高めます。

切戸口

きりどぐち
じうたい ひと
地謡の人たちの出入りなどに使われる、小さな引き戸が切戸口です。

地謡

ぶたいみぎは じうたい
舞台右端に並んで座る役者を地謡（通常は8名）と呼びます。物語の情景や舞台上の人物の気持ちを代わりに表現したりする大切な存在です。

シテ

のう せかい
能の世界では物語の主役をシテと呼びます。能には200以上の演目があり、多くは能面をかけて登場します。

老松

のうぶたい
能舞台の正面奥には、必ず大きな老松が描かれています。能は祈りの芸能ともいわれ、老松には神様が宿っていると考え、いつも神聖な気持ちで舞台に立つのです。

揚幕と鏡の間

あげまく かがみ ま
橋掛りと鏡の間を仕切る5色の幕が揚幕です。シテやワキ、お囃子を担当する役者はみんなこの幕から出入りします。揚幕の奥には大きな鏡が据え付けられているので、鏡の間があります。シテはここで能面をつけ、気持ちを集中させて出番を待ちます。

三本の松

さんほん まつ
ほんぶたい ちか ほう
本舞台に近い方から順番に一の松、二の松、三の松と呼ばれる三本の松が並びます。遠近法の効果を利用して、大きさも順番に小さくなっていきます。

本舞台と柱

ほんぶたい はしら
いっぺん やく
一辺が約6mの正方形の空間が本舞台です。それぞれの隅には、橋掛りに近い方から時計回りにシテ柱、笛柱、ワキ柱、目付柱と名付けられた屋根を支える柱があります。能面をかけたシテの視界は限られているので、柱は目印としても役立っています。

階

きざはし
ぶたいちゅうおう
舞台中央にある階段を階といいます。昔、能の開始を呼びかけるときの上り下りに使われましたが、現在は使われることはありません。

ワキ

あいてやく つと やくし
シテの相手役を勤める役者をワキといいます。現実を生きる人物として登場するので、能面をかけることはありません。

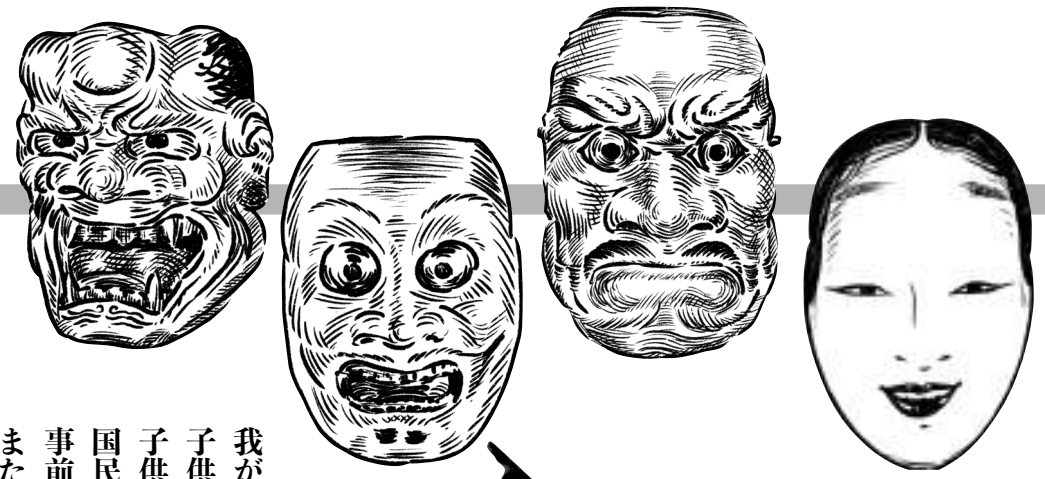


【豆情報】左に描いた渦巻模様は「観世水」、隣のページに描いた鳥は「観世千鳥」と呼ばれます。2つとも観世家を発祥とする伝統的な図柄で、今では日本中で広く愛好されています。

令和4年度

文化芸術による子供育成推進事業 巡回公演事業

一般社団法人観世会 能楽公演



我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた文化芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としています。事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。



能「安達原」シテ：観世清和

本日のプログラム

1. イントロダクション／能を知る
2. お稽古／実技体験
3. 上演曲の解説
4. 能「安達原」上演
5. 質問の時間

(※各校により内容が異なる場合があります)

安達原のあらすじ

諸国を巡って修行の旅をしていた山伏たち（ワキ）が、陸奥（東北地方）の安達原（現在の福島県二本松市辺り）で夕暮れを迎えます。山伏たちは運良く一軒の家を見つけ、そこに住む年老いた女主人（前シテ）に頼み込んで、一晩泊めてもらうことになりました。どこか寂しげな女主人は、糸車（糸繰りの道具）を回しながら日々の辛い生活の様子などを語り聞かせます。やがて夜が更けて寒さが強くなると、山伏たちに「決して寝室は見ないように」と言い聞かせて薪を取りに出かけて行きました。しかし、好奇心が抑えられなくなった山伏の一人が寝室を覗き込んでしまったのです。部屋の中には、数えきれないほどの死骸が積み上げられ、慌てた一行は急いでその場から逃げ出します。そこに鬼となった女主人（後シテ）が追いかけてくるのですが、山伏たちは一生懸命に祈り、その法力に負けた鬼女は姿を消すのでした。

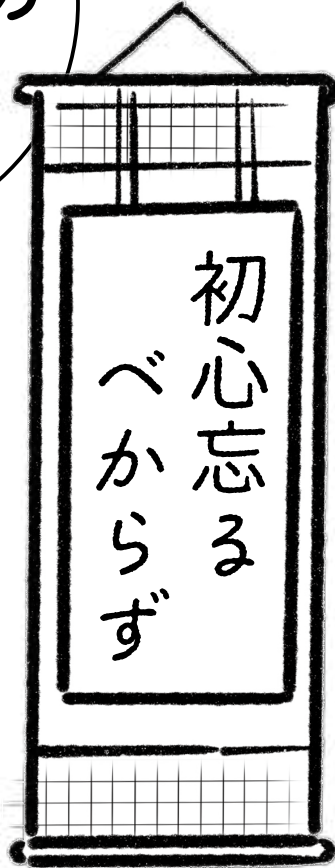
室町時代に大活躍して能を作り上げた世阿弥は、役者としての生き方や心構えを『風姿花伝』をはじめとする本にまとめました。その言葉は能の役者だけではなく、現代を生きる私たちにも多くのことを気づかせてくれます。

3つのキーワードで紐解く

世阿弥のことば



能の世界では花の一言が、美しさや魅力という意味で使われます。毎日、たくさん稽古をして芸を身につけたら、すぐにお客さんにそれを見せるのではなく、一度は自分の内側にそっと秘めてみる。すると、それが人の魅力を高める花（美しさ）になると世阿弥は考えました。しかし、植物の花と同じように、役者の花もずっと保ち続けられるものではないことを知っていたのが世阿弥のすごいところ。やがて、年老いたときに残る花を「真の花」と呼び、妥協を許さない厳しい修行をいつも積み重ねていったのです。

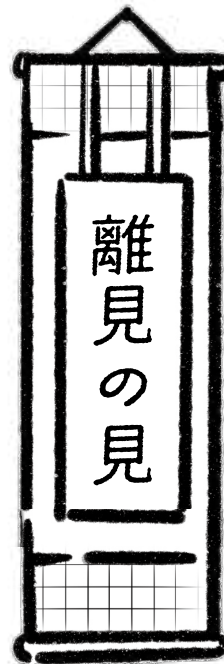


「初心」ってなんだろう!?

「初心」とは、まだ右も左もわからない不慣れな心の状態を指します。世阿弥は未熟だったときのことを忘れず、努力を重ねていくことが大切だと強調しました。でも、初心の段階をひとつ乗り越えても、また新たな初心の段階が訪れます。だから世阿弥は「時々の初心を忘れないように」とも伝えました。子供でも大人でも、初めて経験すること（初心の境地）はたくさんあります。そんなとき、上手く出来なかったときがあったことを忘れずに目の前に丁寧に向き合って、常に芸を向上させようとする思いがこの言葉には込められています。

「離見」が芸の上達に欠かせない!?

スマホで動画撮影が気軽に楽しめる現代。動画に写った自分の姿を観て、今まで気が付かなかったクセなどを発見したことはありませんか？ 自分の姿を離れて観察する、これが「離見」です。世阿弥が生きた室町時代は、動画撮影技術などありません。でも、一流の役者であった世阿弥はそれでも自分がお客さんからどう見えるのかを常に考え、もし下手に見えるところがあれば直していこうと努力したのです。初心を忘れずにいつも努力し、ときには自分を冷静に観察して良くないところは改め、真の花（本当の美しさ）を残そうとした世阿弥の生き方には、私たちも学ぶべきものがたくさんあるはずです。



人を惹きつける「花」とは!?

一般社団法人 観世会

東京都中央区銀座6-10-1
GINZA SIX 地下3階

TEL. 03-6274-6579
FAX. 03-6274-6589

ホームページアドレス <https://kanze.net>
メールアドレス kanzekai@kanze.net

一般社団法人観世会は、1900年に設立された伝統芸能「能楽」観世流の中心を担う団体です。代表を務める二十六世観世宗家観世清和は室町時代に能楽を大成した観世阿弥・世阿弥父子の流れを汲み、日本の能楽界を牽引する重要な立場にあります。東京・銀座にある二十五世観世左近記念 観世能楽堂を活動拠点に定期公演を開催し、約700年にわたる伝統の継承と普及・発展に取り組んでいます。





早分かり年表！

3つの時代から学ぶ「能の歴史」

能には約700年にわたるとても長い歴史があります。
令和の時代を迎えた現在、世界の人々に楽しめる
能の歴史を3つの時代に分けて学んでいきましょう。

能は、日本で誕生した仮面劇

能は仮面（能面といいます）をつけて演じられる日本独自の演劇です。昔の人が作った200種類以上の物語を中心に、今も新しい作品が作られることもあります。能の大きな特徴は、神様や鬼が登場するお話がたくさんあること。たとえば、神様が現れて「毎日が平和でありますように」と祈ったり、怒っている鬼の気持ちを祈りの力で鎮めたり——能には祈りの場面がたくさん描かれていることから、「祈りの芸術」としても長く親しまれてきました。

主役をシテ、その相手役をワキと呼び、笛や鼓などの奏者（囃子方）と、情景描写や登場人物の気持ちなどを謡い上げる地謡という出演者とともに物語が進んでいきます。その歴史は室町時代に始まりますが、起源を辿っていくと1300年以上前の奈良時代にまで遡ることもできます。

1

室町時代

（1336年～1573年）



歴史のスタートは室町時代

今から約700年前の室町時代、能は現在のようなスタイルに完成されました。その中心的役割を果たしたのは観阿弥・世阿弥の親子です。能の役者としてだけでなく、物語の演出家としても才能を発揮し、今もふたりの作った能が数多く上演されています。また、世阿弥が書き残した『風姿花伝』は世界最古の演劇論として現在では世界中で親しまれているのです。

2

江戸時代

（1603年～1868年）



江戸時代、能は公式の芸能に！

徳川家康が江戸に幕府を開き、約250年にわたる江戸時代がはじまります。徳川幕府は、能を「式楽（公式の儀式で用いる芸能）」として認定し、能は格式のある芸能として大切にされたのです。その影響を受けて全国の大名も能を愛好し、お屋敷には能舞台が作られることも珍しくなく、庶民の間では能の謡（物語のセリフ）のお稽古が人気を博します。

3

昭和・平成・令和の時代

（1926年～現在）



世界が認める舞台芸術へ

昭和の時代になると、能の海外公演も活発になります。世界最古の演劇として、能が作り出す独自の美しさが世界中の人たちに伝わったのです。その結果、平成20年にはユネスコの「世界無形文化遺産」に登録されます。平成28年にはアメリカのニューヨークで毎年開催される世界的な演劇の祭典「リンカーンセンターフェスティバル」に二十六世観世宗家 観世清和、嫡男の観世三郎太をはじめとする観世会の能楽師が出演しました。5日間行われた能楽公演は大成功し、世界の人々から喝采を浴びました。

〔豆情報〕左に描いた渦巻き模様は「観世水」、隣のページに描いた鳥は「観世千鳥」と呼ばれます。2つとも観世家を発祥とする伝統的な図柄で、今では日本中で広く親しまれています。

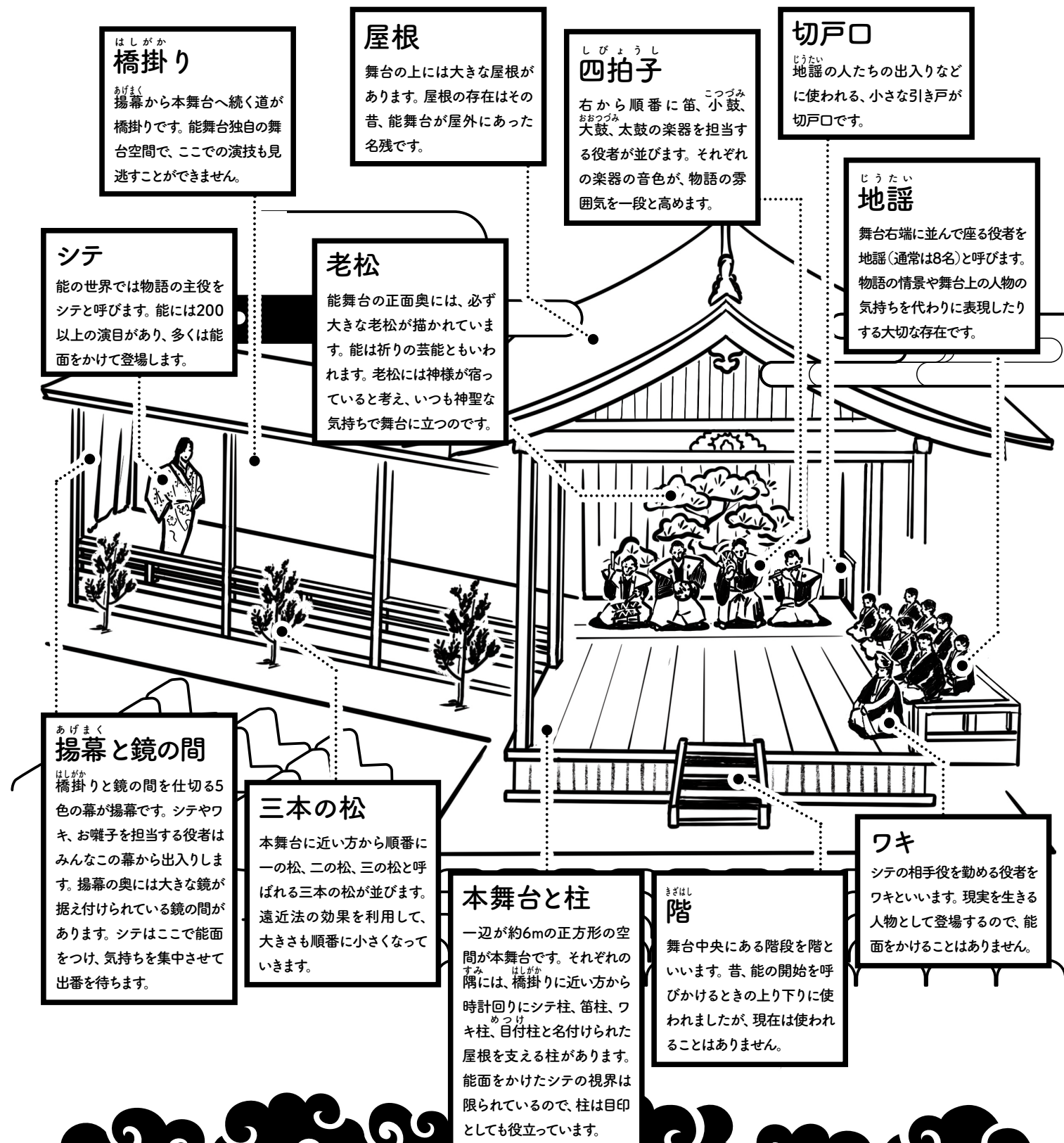


不思議がいっぱい



能楽堂のなかを見てみよう！

能楽堂を訪れると、伝統的な建築様式の大きな舞台が目飛び込んできます。能舞台は、普通の劇場にはない造りがたくさんあります。一つひとつの意味を学んで、能を楽しく鑑賞しましょう。



はしが
橋掛り

あげまく
揚幕から本舞台へ続く道が
橋掛りです。能舞台独自の舞
台空間で、ここでの演技も見
逃すことができません。

屋根

舞台の上には大きな屋根が
あります。屋根の存在はその
昔、能舞台が屋外にあった
名残です。

しびょうし
四拍子

右から順番に笛、小鼓、
大鼓、太鼓の楽器を担当す
る役者が並びます。それぞ
れの楽器の音色が、物語の
雰囲気一段と高めます。

切戸口

じうたい
地謡の人たちの出入りなど
に使われる、小さな引き戸が
切戸口です。

シテ

能の世界では物語の主役を
シテと呼びます。能には200
以上の演目があり、多くは能
面をかけて登場します。

老松

能舞台の正面奥には、必ず
大きな老松が描かれていま
す。能は祈りの芸能ともいわ
れます。老松には神様が宿っ
ていると考え、いつも神聖な
気持ちで舞台に立つのです。

じうたい
地謡

舞台右端に並んで座る役者を
地謡（通常は8名）と呼びます。
物語の情景や舞台上の人物の
気持ちを代わりに表現したり
する大切な存在です。

あげまく
揚幕と鏡の間

はしが
橋掛りと鏡の間を仕切る5
色の幕が揚幕です。シテやワ
キ、お囃子を担当する役者は
みんなこの幕から出入りしま
す。揚幕の奥には大きな鏡が
据え付けられている鏡の間が
あります。シテはここで能面
をつけ、気持ちを集中させて
出番を待ちます。

三本の松

本舞台に近い方から順番に
一の松、二の松、三の松と呼
ばれる三本の松が並びます。
遠近法の効果を利用して、
大きさも順番に小さくなって
いきます。

本舞台と柱

一辺が約6mの正方形の空
間が本舞台です。それぞれの
隅には、橋掛りに近い方から
時計回りにシテ柱、笛柱、ワ
キ柱、目付柱と名付けられた
屋根を支える柱があります。
能面をかけたシテの視界は
限られているので、柱は目印
としても役立っています。

きざし
階

舞台中央にある階段を階と
いいます。昔、能の開始を呼
びかける時の上り下りに使
われましたが、現在は使われ
ることはありません。

ワキ

シテの相手役を勤める役者を
ワキといいます。現実を生きる
人物として登場するので、能
面をかけることはありません。